

第6章 総 括

遺跡の概要 谷地遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町大字円田字谷地地内に所在する。宮城県南西部の蔵王連峰東麓にあり、松川左岸に形成された河岸段丘面上に立地している。本遺跡の北側には寺門前遺跡が隣接し、地形的条件と表面散布遺物の特徴から縄文時代中期の一体を成す集落遺跡と推定されていた。谷地・寺門前遺跡を併せた遺跡の規模は東西約 400m、南北約 470m、面積約 113,000㎡に及ぶ。遺跡中央部の標高は約 128m で東方向にごく緩やかに傾斜し、北側・南側および南東側を東西に延びる後背湿地に挟まれた自然堤防上が遺跡範囲として登録されている。

調査の概要 今回の発掘調査は、消防庁舎建設用地造成計画を原因とする事前調査として実施した。調査区は谷地・寺門前遺跡を併せた範囲の中央部に位置し、発掘調査面積は 1,590㎡である。

確認した遺構は、竪穴住居跡 3 軒、掘立柱建物跡 11 棟、竪穴状遺構 10 基、炉跡 18 基、フラスコ状土坑 56 基、土坑 396 基、配石遺構 1 基、土器埋設遺構 12 基、遺物集中 1 か所、石器集積 6 か所、焼土集積 19 基、遺物包含層 9 か所などである。これらの多くは相互に著しい重複関係を示し、複数時期かつ長期間に及ぶ活動痕跡が累積して残されていたことが判明した。

出土した遺物は、標準規格の整理箱で土器・土製品類が約 500 箱、石器・石製品類が約 150 箱の計約 650 箱であり、水洗洗浄後の総重量は縄文土器 2,970kg、土製品 11kg、焼成粘土塊 2kg、石器 127kg、礫石器 4,769kg、石製品 99kg の合計 7,987kg に及ぶ。整理作業による接合・復元後の遺物総量は約 1,300 箱相当となった。このほか、炭化物、焼骨片、土壌試料などを適宜採取した。

遺物の組成と編年的位置 遺物の種別は縄文土器、土製品、焼成粘土塊、石器、礫石器、石製品である。縄文土器は深鉢を主体として小型深鉢、浅鉢、小型浅鉢、台付浅鉢、壺、脚付壺、小型脚付壺などがあり、多数の復元個体が得られている。土製品は土偶 138 点のほか、ミニチュア土器、栓状耳飾、三脚形土製品、円盤状土製品、円環形土製品、管状土製品、土器片加工品などがある。石器は石鏃、尖頭器、石錐、石匙、石篋、楔形石器、打製石斧、磨製石斧、不定形石器など、礫石器は石皿、台石、有溝砥石、敲石、磨石類、石製品は垂飾品、異形石器、石棒、小型石棒、棒状石製品、乳鉢状石製品、三脚石器などがある。

出土した縄文土器の考古学的な編年上の位置は縄文時代前期末葉の大木 6 式から中期中葉の大木 8a 式にかけてであり、概ね連続的な変遷を示す。型式学的な分類の結果、第Ⅰ群土器：大木 6 式新段階、第Ⅱ群土器：大木 7a 式古・新段階、第Ⅲ群土器：大木 7b 式古・新段階、第Ⅳ群土器：大木 8a 式古・中段階に区分された。このうち量的主体を占めるのは中期初頭の大木 7a 式新段階以降の土器である。その他の出土遺物についても、各段階の土器との共伴関係および型式学的特徴から、概ねこれに対応する編年上の位置が与えられる。

集落の構成と変遷 本遺跡出土土器の編年に基づき、1 期：第Ⅰ群土器期（大木 6 式新段階）、2 期：第Ⅱ群土器期（2-1 期：大木 7a 式古段階、2-2 期：同新段階）、3 期：第Ⅲ群土器期（3-1 期：大木 7b 式古段階、3-2 期：同新段階）、4 期：第Ⅳ群土器期（4-1 期：大木 8a 式古段階、4-2 期：同中段階）として時期設定した。今回の調査面積は谷地・寺門前遺跡を併せた範囲の約 1.4% に過ぎないために全体を推し量ることは困難であるが、調査区周辺における各時期の集落構成と変遷は次のように考えられる。

1 期から 2-1 期にかけての遺構形成は不明確で、集落が未形成であるか、調査区外に集落が形成された可能性がある。本格的な集落形成は 2-2 期からと考えられ、3 期、4 期と大きく三段階に変遷する。2 期の集落は大型の亀甲形建物を主体とし、調査区南西部の空閑地を囲むように放射状に配置されたと考えられる。3 期の集落は大型の亀甲形建物と竪穴住居で構成され、4 期の集落は竪穴住居主体に移行するが、調査区南西部を空閑地とする弧状配置が踏襲されたとみられる。各時期とも建物群外周にフラスコ状土坑からなるまとまった貯

蔵穴群が配置された。また、3～4期には建物群内周に大型貯蔵穴が配置され、遺物包含層（捨て場）が広範囲に形成された。遺構分布は調査区外に広く展開し、空閑地を中心とした施設配置と諸活動の累積による環状構造の遺構配置を形成しているものと推定される。

集落および土器群の年代 本遺跡における遺構出土炭化材・炭化種実・焼骨、土器付着炭化物の放射性炭素年代は、2期（Ⅱ群土器：大木7a式新段階）で4590～4460yrBP、3期（Ⅲ群土器：大木7b式期）で4550～4480yrBP、4期（Ⅳ群土器：大木8a式期）で4510～4370yrBPと測定された。暦年較正年代は2期が5477～4972calBP、3期が5312～4856calBP、4期が5310～4838calBPの範囲に示される。これらの年代値は東北南部および関東地方における従来の測定事例と概ね整合的であるものの、暦年較正年代の範囲は前後の時期と重なる部分が多くなっており、当該期の較正曲線の特性から年代の絞り込みが難しい。先行研究による当該期の関東地方における実年代比定に対応させると、本遺跡の集落は全体として5360～4950calBPの概ね400年間程度の存続期間を推定することができる。

集落における諸活動 多量の焼成事故品の存在から、調査区周辺においては集落期を通じて縄文土器・土偶の製作が活発に行なわれたと考えられる。在地土器の胎土には多量の火山ガラスからなるテフラが混和されており、火山ガラスの熱的特性を利用して相対的に硬質緻密質な製品を焼成することを意図したと考えられる。しかし、焼成温度が過度に上昇して加熱強度が強まった場合には発泡や軟化変形を生じやすく、特徴的な焼成事故品が残された。使用痕跡を認める土器の比率は一般的な集落遺跡と比較してかなり小さく、焼成事故品の廃棄行動が繰り返されたことが影響していると考えられる。

石器についてはガラス質流紋岩などの在地石材を用いた石鏃・楔形石器など小型石器の製作と、主に素材剥片や製品として搬入されたと考えられる珪質頁岩を用いた二次加工による石器製作や刃部再生を中心とするものであったと考えられる。ただし、調査区内においてはこうした製作作業の痕跡が希薄であり、破損ないしは刃部再生により損耗した石器と転用を重ねて損耗した礫石器が多くを占めることから使用・廃棄が中心であったと考えられる。

出土焼骨片に見る動物資源利用では二ホンジカ・イノシシが卓越し、これらを対象とした儀礼行為を行っていた可能性が考えられる。また、炭化材・種実に見る植物資源利用ではクリを食料資源の主体とする一方、住居構築材などの材料資源としてクリ材を多用しており、クリ花粉が検出されていることから集落の周囲に人工的にクリ林を形成・管理していた可能性が考えられる。土器付着炭化物による食性分析では、C3植物およびC3植物摂取動物を含むものと推定され、内陸部の植生・動物相に対応した食料資源利用が示唆された。本遺跡の東方10km付近に位置した阿武隈川下流域の沿岸部などの海産物や、内水面におけるサケ・マス利用について具体的には明らかにできなかったが、季節的な利用状況の変動や分析試料数の制約なども考えられる。仙台湾沿岸部の海産資源については、後述するような山形県内陸部との物流・交流において重要な意味を持っていた可能性も考えられ、今後も機会を得て分析・検討を重ねる必要がある。

遺物の変遷と地域性 本遺跡の土器群は大木6～8a式土器の範疇にあり、全体としては宮城県南部から福島県北部および山形県内陸部にかけての地域相の中に位置付けられる。このうち、特に宮城県南部から福島県北部の川崎町中ノ内A遺跡、七ヶ宿町小梁川遺跡、福島市月崎遺跡、飯舘村上ノ台A遺跡出土土器との共通点が多く認められる。前半期（1～3-1期）には関東地方（十三菩提・五領ヶ台・阿玉台式系統）および北陸地方（新保式系統）の異系統土器を伴う。2-2～3-1期の大木7a～7b式土器（中ノ内系統）における器形と文様構成は極めて多様で複雑な様相を示す。これらの在地土器と異系統土器は当初、独自性の強い一群として並存関係にあったが、3-1期には異系統土器の一部の文様要素が融合して在地土器に亜種を生み出した。後半期（3-2～4-2期）になると異系統土器が見られなくなり、3-2～4-1期にかけて在地または隣接地域で生じたいくつかの在地亜種が並存する段階を経て、4-2期には器形と文様要素が集約化された極めて斉一性の強い土器

群が成立していることが確かめられた。この段階において大木式 8a 土器の文様の施文原則は、それまでの単位文の整然とした配置から臨機応変な構成に大きく変化し、その後の大木 8b ～ 9 式土器の文様展開に大きな影響を与えるきっかけとなっている。

本地域における特徴的な祭祀具として、土偶、三脚形土製品、三脚石器、鼓形石棒がある。土偶は有脚立像型を主体とし、ほぼ全て西ノ前型土偶の範疇と考えられる。2 ～ 4 期にかけて概ね連続的な変遷を示し、その内容は山形県内陸部から宮城県南部を中心に分布する西ノ前系列を主体とし、福島県を中心に分布する石生前系列の影響が僅かに見られる。両系列ともに顔面表現のない瓶栓状頭部から顔面表現を持つものへと変遷するが、本遺跡では顔面表現の省略を概ね堅持したと考えられる。大木 7b 式期に出現し 8a 式期には主流となる顔面表現三脚形土製品は、やや大型で端部が母指状を呈する Y 字形の I 類と、やや小型の逆三角形を呈し乳棒状表現を伴う II 類がある。分布を検討したところ、前者は大木 7a ～ 7b 式期の山形県南東部から宮城県南部にかけての蔵王山麓を中心に分布し、後者は新潟県中越地方の信濃川流域を中心に分布するものが大木 8a 式期の福島県北部に飛地的な分布を示すことが分かった。三脚石器についてもこれらに概ね共通する形態と分布が見られる。鼓形石棒はこれまでに本遺跡例 2 点を含めて 6 遺跡 8 点が確認されており、大木 7a ～ 7b 式期の山形県南東部から宮城県南部にかけての蔵王山麓を中心に分布する。

地域間の物流・交流 本遺跡の地理的位置と上述のような遺物の地域性から、本集落は宮城県南部から福島県北部および山形県内陸部を含む地域圏に属したと考えられる。多様な原産地構成を示した希少石材の黒曜石はこの地域圏内における主要原産地を網羅しており、最上川流域産の珪質頁岩を含めて活発な物流・交流が窺える。このうち、宮城・山形県側の蔵王山麓を中心とする地域には、土偶、三脚形土製品、鼓形石棒などの祭祀具が集中的な分布域を形成している。石器石材や海産資源などの資源分布や季節的環境の異なる蔵王連峰の東麓・西麓地域が相互補完的に連帯を強め、東西の物流・交流を活発化させていたことを示すと考えられる。こうした地域圏を大きく越えて流通したものとして、北海道産のアオトラ石製磨製石斧、北陸産のヒスイ製裝飾品、蛇紋岩製磨製石斧、北上産の蛇紋岩製磨製石斧があり、関東・北陸系の異系統土器には搬入品と考えられるものもある。本遺跡の集落は宮城県南部の遺跡分布において地理的に中間的な位置に立地し、規模も大きかったことが想定される。また、多量の縄文土器のほか、土偶を中心とした祭祀具を多量に製作するなど生産・祭祀活動も活発であった。さらに上述のような大木式土器分布圏内外の地域間における物流・交流の拠点としての機能も窺えることから、宮城県側の蔵王山麓において中核的な役割を果たした集落として位置付けることが可能である。

結語 2011 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生し、地域防災拠点の重要性が再認識される中、老朽化した消防庁舎の移転新設に関わる事前調査として同年 7 月、本遺跡の発掘調査は着手された。縄文時代の集落中心部であるとした事前の確認調査の所見を裏付けつつも質・量ともに想定を大きく上回る形で推移した野外調査は、当地域では異例の冬季継続を図りながら翌夏までの通算 14 か月間を要した。その後、膨大な出土品の整理を継続し、調査の鉤入れから 10 年余りを経てようやくここに記録保存報告書を上梓できる運びとなった。

本遺跡の記録保存に際して指導・助言・協力を賜った各位に改めて御礼申し上げるとともに、学術的見地からの指摘や課題について本書での資料提示や検討が及ばなかった点については今後の継続的課題としたい。

今回の発掘調査によって、本遺跡は縄文時代中期前半の蔵王東麓地域において中核的な役割を果たした大規模な拠点集落跡であることが判明した。調査範囲は集落全体のごく一部に過ぎないが、集落の構造と変遷および集落内での諸活動の一端を窺い知ると同時に、広域的な地域間交流の様相も明らかとなった。

ここに報告した谷地遺跡の発掘調査成果は、縄文時代中期の蔵王東麓地域における人々の具体的な暮らしぶりや当時の地域社会の実態を示すとともに、東北地方南部における縄文時代中期社会の形成とその様相を考察する上でも極めて重要な手掛かりとなるものである。